

皆さん、おはようございます。校長の倉崎です。

通学路や敷地の桜が一気に開きました。一雨ごとに、春本番が近づいてきます。

さて、今日は、令和4年度のしめくりでもあります。

今月1日、この年度を一緒に過ごした3年生～普通科60期生と、理数科としては最後の52期生～が、立派に卒業していきました。3年間をコロナ禍と共に送った彼らに、式辞のなかで、私はこう述べました。

「失われた3年」とよく言われます。でも、この矢の原台には間違いなく

皆さんの「三とせの青春」がありました。

しかし、私のそんな言葉は必要なかったぐらい、彼らは、仲間や先生、家族と大いに泣き、笑い、初めての「校歌斉唱」と、「楽しかったー!」という言葉と共に巣立っていきました。

後続く皆さんへ。改めて、今年度の初めに述べた言葉を贈ります。

「どんな1年になるか、ではなく、あなたがどんな1年にするのか、です。」

南高ならではのチャンスを生かし、もっと言えば、南高の強みを利用して自分の高校生活をつくってほしいということ。私の願いはそれに尽きます。

令和4年度、世の中は決して平穏なものではありませんでした。コロナ禍の影響も受け続けました。そんな状況下でも、果敢に挑戦する南高生の姿が随所で見られたことに喜びを感じています。全学年・全学科がスーパーサイエンスハイスクールのプログラムに本格的に挑んだ初めての年でもありました。大学や県内外、ときには海外の方々との出会いをとおしての学びがありました。「大人だって、会社だって、探究の連続なんだよ」という言葉が印象に残っています。

2年生の研修旅行や、学園祭、予餞会など、さまざまな活動が、創意工夫のもと一歩前進しました。県総体男女総合優勝をはじめ、部活動や地域活動をとおしての成長にも拍手を送ります。

さて、こうして振り返りながらお話ししていると、自分がさまざまな「ことば」に支えられ胸に刻みながら生きていることを痛感します。記憶に新しい、「三苦の一ミリ」「あきらめない」「つなぐ」「信じ切る」「憧れてしまったら越えられない」などなど。思い出すだけでもぐっときます。余談ですが、野球・侍ジャパンの栗山監督を最初に覚えたのは現役時代。小・中・高の教員免許をもつ珍しいプロ野球選手、ということが心に残りました。

言葉に心を込めて遣い、言葉でつながりあえること。それが、令和5年度の南高生へ、そして自分自身への願いです。

それでは皆さん、春爛漫の4月10日に元気に再会しましょう。新たなメンバーの加わるチーム南が、さらに強い絆のもと前進できるよう願い、終業式の挨拶とします。